114
A 4430

早稲田大学図書

大正十一年四月
大臣秘書官寄贈

追啓

呈仕候然ハ第三十三号覺書閣下ニ拜
呈仕度尤モ右覺書ハ太政官御會議ノ節決用相
成候テハ稍々決不都合ノ儀有之可申哉モ難計
奉存候ニ付態々公然ト進呈不仕次第ニ決坐候
間若シ右覺書決會議ノ節愈決不都合ニ候得者
決議迄ノ紙面中ヨリ決取除可被下候様ニ
千八百七十四年七月五日東京ニ於テ

チヤ、レス、レゼンドル

大隈重信閣下

A 4430
163

第三十三号覧書

去ル四月中日本ヨリ「フォルモサ」蕃地ヘ使ヲ送ラントスル意アルノ新聞初メテ北京ニ達シタル時總理衙門及ヒ福州ノ地方官吏ハ英米ノ公使其使ノ出立ヲ妨制シ得可キヲ信シタリ故ニ大政府モ地方官廳モ日本ノ兵壯丹人種ノ領地ト境ヲ接スル支那ノ版圖ニ近ツクニ方リ其擧動ヲ窺フ可キ豫備ヲ為スヿナシ而シテ斯ク其豫備ヲ怠リシ所以ヲ辨解スル重要ナル箇條ノ一ハ

往キニ荷蘭ノ領地タリシ「フヨルモサ」ノ一部ヲ初メテ
支那ノ版圖ニ帰セシ以来「フヨル(モサ)」ノ蕃地ハ常
ニ帝國境界ノ外ニ在ルト看做シ且ツ這回日本
人其蕃地ニ侵入ストト雖モ支那ノ版圖ヲ犯カステ
アラサルヿヲ思考セシニ在リ然ルニ近頃支那大
政府日本兵ノ「フヨルモサ」蕃地南隅ニ據ルハ其意蓋シ
生蕃ノ問罪ヲ要トセス却テ全島ニ占據スル手始メノ處
置ヲ為サントスルニ在ルヲ信スルニ至リタレハ右日本兵
ノ侵攻ヨリ生ス可キ諸件ヲシテ一切地方官ノ責任タラシメタリ
方今北京ノ兵部尚書「イン、クエイ」氏ヨリ摂政皇太后

(贈リシ同治九年七月十八日附ノ秘書中ニ左ノ文詞ヲ
記シタリ(但シ此秘書ノ寫シハ予之ヲ所持ス)
福建沿海ノ諸港ニハ今迄防守ノ為メ兵士ヲ備ヘタ
リシカ同治三年以来專ラ「ウンナン」及ヒ「ヒュペー」ノ二
省ヨリ招キシ夥多ノ兵士ニ依頼スルヿトナリ時々
ノ需要ニ徒ヒ此兵士ヲ所々ノ陣營ニ分配シ又ハ戰
鬪ノ為メ所々ニ之ヲ派送シタリ然ルニ近頃司庫ノ
金額缺乏シタルカ故ニ次第ニ兵士ヲ解散シ方今ニ
至テハ福建ノ上部及ヒ下部ニ在ル重要ノ地ト雖
モ僅カニ兵士二三百人ヲ残シ置キ又或ル所ニ於テハ

僅カニ数十人ヲ残シ置クニ過キスシテ到底兵隊
ノ姿アル支ナシ
又右福建ノ都督民兵隊ノ助ケヲ得テ福建ノ或地ヲ
防守シ得可キ方法ヲ説キタル後更ニ曰ク
「フヨルモサ」ハ海中ニ離隔スル島ニシテ之ヲ防守ス
ルヿ極メテ難ク兵士ハ其負数甚タ寡ク其地ノ
土人ハ動モスレハ忠節ヲ失ハントス故ニ其虞慮ハ
福州及ヒ厦门ニ比スレハ更ニ大ナリ
右報告書ヲ送リタル頃兵士ヲ指揮セシ一士官ハ今ニ
於テ猶福建ニ在リテ旧来ノ韃靼将軍及ヒ税関都
督ノ職ヲ務ム蓋シ此人ハ頗ル老年ニシテ皇帝
ノ一族タル第一等ノ士官ナリ
千八百七十年中皇帝政府天津虐殺ノ一條ニ付
キ佛蘭西ト戦ヲ交エントスルノ恐アリテ兵備
ノ模様ヲ検査シタルニ曰リ前文記スル所ノ秘
書ヲ差出ス「トナリシカ「チュンホウ」氏ノ仏國ト
ノ談判行届キタルニ曰リ其恐幸ニ消散スルヲ
得タリ故ニ当時在リノ侭ニテ兵備ノ紊乱シタ
ルヲ変革スルヿナク福建ヲ防守スルノ備ナキ
ヿ以前ニ異ナラス蓋シ此事情ハ皇帝ノ欽差「セ

チヲフール西郷ト談判ヲ為ス為ニ「フヲルモサ」ニ
赴ク途中福州到着ノ節必ス之ニ告意ス可シ而
メ日本ト支那トノ間ニ生セシ故障平穏ニ治定
スルヲ得ハ韃靼将軍及ヒ福建都督ノ両氏共ニ
其皇帝ニ對シテ已レノ無辜タルヲ弁解スル一
敢テ難カラサル可ク然レ氏若シ其両國間ノ故
障ヲ平穏ニ治定スルヲ得サル時ハ皇帝ノ欽差
ヨリ福建ノ都督及ヒ韃靼将軍ノ福建ニ防禦ノ
備ヲ為スヲ急リタル罪ヲ訴告スル一必然ニシ
テ然ル時ハ此両氏ノ罰ハ必ス死刑タル可シ

前文記スル所ニ就キ以テ之ヲ観ルニ福建ノ都
督及ヒ韃靼将軍ハ他ニ比スレハ両國間ノ故
障ヲ平穏ニ治定スルニ最大ノ管係アル一明カ
ニシテ若シ日本ノ欽差此二士官ニ向ヒ過分ノ
要需ヲ為サヽレハ此二士官北京政府ヲシテ日
本ノ要需ヲ容諾セシムルニ盡カス可キ一敢テ
疑ナシ
今試ミニ問フ日本ノ要需ハ如何ト而メ其答ハ
左ノ如シ
第一　南「フヲルモサ」ノ蕃地ハ元来支那ノ之ヲ

領スヘキ権アラスシテ今日本ヨリ之ヲ攻取シタルカ故ニ日本ニ之ヲ保有スヘキ権アル旨ヲ日本ヨリ要需スル事

第二　若シ又日本ノ「フヨルモサ」南方ノ地ニ兵ヲ送リタル趣意ハ唯僅カニ琉球人殺害ノ罪ヲ問ヒ且ツ向後其海岸ニ於テ更ニ斯クノ如キ兇悪ノ行アルヲ防制スベキ處置ノ着手ニ過キストヲ為サハ日本ヨリ支那ニ其一旦攻取セシ地ヲ還シ之ニ代ヘテ特定ノ約定ヲ行ハシメ就中支那ヨリ償金ヲ拂ハシムヘキヿヲ日本ヨリ支那ニ拠合フヘキ事

若シ第一ノ要需ニ従テ日本ト支那トノ間ノ故障ヲ治定セントセハ福州ニ派送セシ日本ノ欽差ヨリ須ラク支那ノ欽差ニ告クヘシ曰ク日本ニテ蕃地ニ占據スルハ即チ支那ノ益タルヿヲ支那皇帝ニ奏聞アランヿヲト而メ日本ノ欽差ハ其論ヲ主持スル為メ嘗テ予カ第三十二号ノ覚書ニ添ヘ差出セシ去ル六月三十日附書翰ヲ以テ閣下ニ申進セシ論理ヲ用フヘシ

若シ又第二ノ要需ニ従テ支那ト日本両國間ノ故

障ヲ治定セントセハ予思ヘラク福州ニ甲鉄船
一艘厦門ニ甲鉄船一艘ヲ差向リレハ支那地方
官吏ノ為メ至大ナル助ケトナルヘシ而メ今其
然ル所以ヲ言フニ斯クノ如ク日本ヨリ右二港
ニ甲鉄船各一艘ヲ差向リレハ支那ノ地方官吏
等皇帝ノ欽差即チ支那ノ欽差ニ賄賂ヲ贈リテ福建ニ
防守ノ備ヲ急リタル旨ヲ右欽差ヨリ北京大政
府ニ告クルノ患ヲ除キ而メ其地方官吏等右欽
差ト謀ヲ通シテ北京大政府ニ奏ス可シ曰ク日
本ノ兵ノ社寮ニ上陸スルヲ防制セサル所以

ハ日本ヨリ福建ノ港ヲ封港シ且ツ「フヲルモサ」
ニ支那兵ヲ載セ送ルヘキ運送船ノ出帆ヲ妨ク
ル為メ其海岬ニ指向ケシ甲鉄船ト戦フ可キ甲
鉄船ノ支那ニ備ハラサルニ因レハナリト然ル
時ハ福建ノ地方官吏等ヒレノ罪ヲ無解スルニ
アラス却テ大政府ノ怠ラ責ムル者トナリ又日
本ノ欽差ト條約ヲ結ヒ日本兵ノ「フヲルモサ」ヲ
退クラ看テ実ニ歓慌ニ堪エサル可シ蓋シ其條
約ハ固トヨリ両国政府ノ允諾ヲ受ケサル可カ
ラサル者ト雖モ支那ノ地方官吏及ヒ同國欽差

ハ此條約ニ因リ日本ニ對シテ出兵ノ費用ヲ償
ヒ且ツ其他相當ノ償ヲ為ス可キ筋ヲ保証ス可
シ然ル時ハ支那ノ欽差右ノ條約ヲ結ヒタル上
ニテ必ス北京政府ヲシテ之ヲ允諾セシムルノ
術策ヲ施ス可キヿ敢テ疑ヲ容レサル所ナリ
前文記スル所ハ兩國交際ノ故障ヲ治定ス
ル二箇ノ方法ノ大略ニ過キスシテ勿論ノ
ノ商議談判ニハ其処置頗ル巧ナルヲ要
スベク而シテ其詳細ノ説ハ數巻ノ冊
ニ非サレハ能ク之ヲ尽クス可カラス然レモ

其詳細ノ事ハ宜シク欽差ニ之ヲ委シ其時ノ景
状ト必須トニ随テ之ヲ断定セシム可ク又右欽
差ハ其思考スル所ニ於テ談判ノ目的ニ達スル
為ノ有益ノ人アリト為サハ公然ト陰密トノ別
ナク須ラク其人ヲ使用スルノ許ルシヲ受クヘ
シ謹呈

千八百七十四年七月五日東京ニ於テ

チヤールス、レゼンドル

蕃地事務総裁

大隈重信閣下